

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370564

研究課題名(和文)主観的事態把握と対人関係的機能の発達に関する多言語研究

研究課題名(英文)A Multi-Lingual Study on Subjective Event Construal and the Development of Interpersonal Function

研究代表者

早瀬 尚子(HAYASE, NAKO)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：00263179

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、懸垂分詞由来の表現が、新しく対人関係的機能を獲得していることを、個別の表現のケーススタディを通じて明らかにした。具体的には、(1) Supposingに始まる従属節が脱従属化して主節的に使われる、(2) granted節からgrantedだけが単独語彙化して応答機能を発達させている、(3) speaking of節からspeaking of whichという語彙化現象が生まれ、談話機能的に意味を変化させていくこと、の3つの言語現象について明らかにした。また共通して「対人関係的」変遷が見られること、それが現在分詞か過去分詞かによって意味変化の道筋が異なること、を最終的なまとめとした。

研究成果の概要(英文): This project has shown that dangling-participle-related expressions acquire new functions, i.e., interpersonal or discursive functions. Specifically, (1) A supposing-clause, which is originally used as a dangling subordinate clause, shows insubordination and can be used as a main clause with special intersubjective meaning; (2) A past participle *\_granted\_*, originated from dangling granted-clause, come to be used independently to show a responsive function in discourse; and (3) A new expression *\_speaking of which\_* as a chunk emerges from another dangling clause beginning with *\_speaking of\_*, and come to serve again as a interpersonal or discursive function. It has been also revealed that all the examples share some intersubjective function, while the semantic path varies depending on the form of dangling participles, i.e. whether it is present participles or past participles.

研究分野：認知言語学 構文文法研究

キーワード：対人関係機能 懸垂分詞 意味変化 主観性

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は過去5年間にわたって懸垂分詞構文についての研究(早瀬 2009, Hayase 2011 など)を進めてきた。懸垂分詞は分詞句の主語と主節の主語とが一致していない「破格」の構文だが、現実には頻繁に目にする表現である(e.g. Entering the hotel, the immediate lobby is fitted with walnut wall cabinets.)。「破格」でも繰り返し用いられる動機について、申請者の研究では以下の傾向を明らかにしてきた。

- (i) 「観察者・発話者(=分詞句の主語)の移動の結果、主節の事態が知覚・観察される」という、非明示的だが構文が与えるシナリオ的意味(=「発見のシナリオ」と命名)がある
- (ii) 主節は観察者・発話者の知覚内容と捉え直される必要がある
- (iii) 懸垂分詞構文は、主節が現在時制であったり分詞句表現が仮想的移動であったり等の特徴から、バーチャルで概念的な事態把握を表すための構文である
- (iv) 懸垂分詞・主節の二つの事態は、字義通りには互いに因果関係なく独立した存在だが、メタ的な観察者・発話者の存在およびその知覚行為を補うことで、初めて Figure-Ground の原則に合致し、動機づけられ関連づけられる

## 2. 研究の目的

### (1) 懸垂分詞節がそれぞれに独自の談話機能を発達させている現状を事例研究的に明らかにする。

談話機能化する分詞節は常に意味上の主語が話者として解釈されるため、懸垂分詞構文を元に発達したと考えられる。またこの談話機能化は発話の場での使用である話し言葉を中心として発生している。このように、事態把握構文を元に対人関係的な機能が派生してくる現状を、共時的・通時的になるべく広範囲で明らかにする。

### (2) 懸垂分詞構文の有標性と懸垂分詞節の生産性との関係についての説明を試みる。

英語の懸垂分詞構文は、特定の条件の下ではその使用が動機づけられているものの、英語全般としては依然として有標な事態把握であり、その分布も限定的である。それなのに、なぜ懸垂分詞節の談話機能化・対人関係化現象は英語において(他言語、少なくとも日本語よりも)比較的進んだ形で見られるのか。その理由・動機づけを明らかにする。

### (3) 多言語における懸垂分詞構文および懸垂分詞節の分布の比較を行う。

懸垂分詞構文的に、2つの事態把握を主体的に振り分ける表現形式がどの言語でどの程度まで許されるのか、また、懸垂分詞節の意味変化は他の言語ではどの程度見られるのか、また(2)の理由の妥当性は類型論的に検証できるのか、という点について、日本語やそれ以外の言語との対照研究を行う。

## 3. 研究の方法

コーパスデータを用いることで、該当する表現の分布の偏りや通時的な変遷について検討を重ねた。コーパスは COCA (Corpus of Contemporary American English) や BNC (British National Corpus) 等を使い、計量的および質的観点からの検討を行った。

## 4. 研究成果

懸垂分詞由来の表現の意味変化について、以下の3つのケーススタディを行い、成果を上げることができた。

### (1) 「Supposing 節の脱従属化現象」

懸垂分詞節である supposing 節が if 節とおなじように従属節単独で用いられる事例を対象とし、一つの独立した意味を担うようになる変遷のプロセスを示した。また supposing 構文の補文への入力として、他人の発話をそのまま受け入れるというメタ言語的な性質のものが関わってくることを議論した。

### (2) 「Granted 節の意味の変遷および granted の語彙化」

Granted 節の主節化現象が時代を経る毎にみられること、また granted で結びつけられる前後の文脈関係が、論理的な逆接関係から単なる「異なる話題の方向性を持つ関係」へとゆるめられていくこと、それにより結果として Granted という表現単独で相手の発話を受け入れるという応答機能が生じること、を明らかにした。

### (3) 「Speaking of which の語彙化現象」

Speaking of で始まる懸垂分詞の使用条件を明らかにし、そこから Speaking of which というチャンクが成立するプロセスを考察した。Speaking of which は話題を転換する時に用いられる表現で、話題が関連しているものから、全く関連性のないものへのシフトも可能とする表現となっており、話題転換機能が顕著に見られる。

このように、懸垂分詞由来の事例の意味変化パターンを詳細に検討する中で、すべて話題転換という談話上の使用へと意味を変化させていることがわかった。

さらにはこれら全体をまとめる形で、「懸垂分詞表現の意味変化がたどる道筋」には現在分詞主導型と過去分詞主導型の2つがあることを考察から導き出した。具体的には、現在分詞由来の Speaking of which は Talking of which などと共に、会話冒頭において話題をシフトさせる役割を発達させる。一方で、過去分詞由来の Granted や Having said that などは、一旦相手の言ったことを認めてそれに譲歩する形で自分の意見を述べる、という機能から、相手の言う内容を一端は受け入れておきながら全く違う方向へと話題を変化させる、という機能へと、いずれも譲歩経由で一律に変化を見せていることがわかった。道筋は異なるものの、いずれも話題転換にま

つわるマーカーになっていくことは共通しており、このパターンについて、構文化という考え方と絡めて説明できるという見通しを示した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

1. 早瀬尚子(2017)「従属節からの談話標識化—speaking of which と granted」言語文化研究共同プロジェクト『認知・機能言語学研究 II』大阪大学大学院言語文化研究科, 11-20.
2. 早瀬尚子・渡邊淳也(2016)「英語の懸垂分詞とフランス語の主語不一致ジェロンドイフの対照研究 和田尚明・渡邊淳也(共編)『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』97-179.
3. 早瀬尚子(2016)「分詞構文が懸垂分詞構文になるとき: コメント機能成立の条件」言語文化研究共同プロジェクト『認知・機能言語学研究 I』21-30.
4. 早瀬尚子(2015)「懸垂分詞由来の構文化: Traugott and Trousdale (2013)の観点から」言語文化研究共同プロジェクト『時空と認知の言語学』IV, 21-30.
5. 早瀬尚子(2014)「insubordination としての supposing 節」言語文化研究共同プロジェクト『時空と認知の言語学』31-40.

[学会発表](計10件)

1. Naoko HAYASE (2017) “From Participles to Discourse Markers: A Commonality of Dangling-participle-related Expressions,” International Cognitive Linguistic Conference 14. (Tartu, Estonia)
2. 早瀬尚子(2017)「従属節からの談話標識化の諸相: 構文化の観点から」第5回用語論フォーラム 招待発表 2017年3月5日(於京都工業繊維大学)
3. 早瀬尚子(2017)「従属節からの談話標識化の諸相」欧米言語文化学講演会 招待講演 2017年2月3日(於奈良女子大学文学部)
4. 早瀬尚子 (2016)「懸垂分詞表現のメタ言語使用とその条件」関西大学英語英文学会招待講演.2016年10月22日(於 関西大学文学部千里山キャンパス)
5. 早瀬尚子 (2016)「意味変化と構文化: 構文研究の発展」『言語と情報研究プロジェクト 第56回公開セミナー』広島大学 大学院総合科学研究科 21世紀プロジェクト (2016年7月2日)
6. Naoko HAYASE (2016) “Constructionalization of Dangling Participial Clauses/Phrases: with Intersubjective or Discursive Function,” UK-Cognitive Linguistic Association 6 (英国認知言語学会) 2016. 7.20. University of

Bangor.

7. Naoko HAYASE (2016) “Constructionalization of Dangling Participial Clauses/Phrases: with Intersubjective or Discursive Function,” International Workshop on Cognitive Grammar and Usage-Based Linguistics, 2016.6.18 Osaka University.
8. Naoko HAYASE (2015) “Granted from a Conjunction to a Discourse Marker: A usage-based development of (Inter)subjectivity” International Cognitive Linguistics Conference 11, July 23.
9. 早瀬尚子 (2015)「懸垂分詞と構文化」日本英語学会シンポジウム『構文変化と談話・情報構造 - データと理論の融合を目指して』(2015年11月23日)
10. Naoko HAYASE (2014) “Supposing as an intersubjective marker: A scenario-based study on the development of (Inter)subjectivity in insubordination,” (第5回イギリス認知言語学会: ランカスター大学: 2014年7月30日)

[図書](計6件)

1. 早瀬尚子(2017)「従属節からの語用論的標識化—発話動詞関連の懸垂分詞構文がたどる新たな構文への道」西原哲雄・田中真一・早瀬尚子・小野隆啓(共編著)『現代言語理論の最前線』開拓社 231-248.
2. 早瀬尚子(2017)「分詞表現の談話標識化とその条件」天野みどり・早瀬尚子(編著)『構文の意味と拡がり』くろしお出版. 43-64.
3. 早瀬尚子(2016)「懸垂分詞から見た(inter)subjectivity と(inter)subjectification, 中村芳久・上原聡(共編著)『ラネカーの(間)主観性とその展開』
4. 早瀬尚子 (2015a)「懸垂分詞を元にした談話機能化について—granted の意味機能変化—」『言語研究の視座—坪本篤朗教授退職記念論文集』開拓社, 310-324.
5. 早瀬尚子 (2015b)「Supposing による脱従属化現象: 発話行為の発生について」『言葉のしんそう(深層・真相)—大庭幸男教授退職記念論文集』英宝社, 399-410.
6. 早瀬尚子(2015c)「Supposing 節の構文化現象」秋元実治・青木博史・前田満(共編著)『日英語の文法化と構文化』75-106.

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

[その他]

ホームページ等 特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

早瀬 尚子 (HAYASE Naoko)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授  
研究者番号：00263179

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

渡邊 淳也 (WATANABE Junya)  
筑波大学・大学院人文社会系・准教授  
研究者番号：20349210

(4)研究協力者

なし